

(3) 自由研究

1 小型霊長類の肘関節構造の比較：内部構造の観察と外部形態との関係

江木直子（京都大・理）

関節形態の種間比較を、霊長類の上腕骨猿位関節部を例にとり、内部構造に焦点をおいて行なった。骨構造の観察には、骨格標本(晒し骨)をpQCTで撮影した画像を使った。標本とpQCT機器は、京都大学霊長類研究所と大学院理学研究科自然人類学研究室所蔵のものを用いた。観察では、まず、約20種の霊長類について、上腕骨遠位関節の横断面影像を各数枚ずつCTで撮影した。ここから、関節内の緻密骨と海綿骨の相対的な量や骨梁数は体サイズによって大きく異なることが示唆された。次に、内部構造を外部形態やlocomotionの違いとに関連づけるために、体のサイズの似ている9種の霊長類を選び、比較を行なった。この比較では、capitulum・trochlear gutter・trochlea 中央部の矢状方向断面影像を用い、ロリス類では相対的に緻密骨が厚く、逆にグエノンやキツネザルでは緻密骨が薄く、海綿骨の密度が高いという観察結果を得た。体サイズの似ている霊長類の中でも、緻密骨や海綿骨の骨量、海綿骨の密度に変異があり、locomotion 或いは系統と関連がある可能性が示唆された。

2 更新世松ヶ枝脊椎動物群の研究

荻野慎太郎（鹿児島大・理工）

明治から昭和初期にかけ、北九州市門司区の石灰採石場の洞窟堆積物中から産出が報告された、松ヶ枝動物群に含まれる動物化石のうち、サル類の幼獣の頭骨を用い形態学的に考察した。現生、および栃木県葛生産の後期更新世のニホンザル化石を用いた統計学的解析の結果、松ヶ枝産サル化石標本は、現生ニホンザルと比較してかなり大きな乳臼歯を持っていることが明らかとなった。一般的に縄文時代の遺跡から産出するニホンザルは現生種に比べて大型の傾向が見られるとされている（茂原ら、2002）が、本研究は化石ニホンザルが大型であるという傾向を統計学的に裏付けることになった。

松ヶ枝動物群を構成する多くの要素は、同時期の周口店動物群に対比可能なことが考えられるが、今回の研究において、更新世のニホンザルが大型の乳臼歯を持っているという結果が得られたことや、更新世及び縄文時代のニホンザルが形態学的に周口店動物群の要素として知られる大型のマカクザル化石 (*M. robustus*) との関連を持つという指摘(Iwamoto, 1975)をふまえると、

ニホンザルの祖先は43万年前頃日本列島に移入してきたとされる、華北動物相の一員であった可能性が高い。松ヶ枝産ニホンザル化石標本はニホンザルの系統関係の再考察や島嶼化に伴う形態変化の問題について議論していくうえで、今後重要なデータとなるであろう。

4 薬剤によるニホンザルの中枢神経老化および細胞死の防御に関する研究

丸山和佳子、永井雅代（国立療養所中部病院・長寿医療研究センター・老年病）、
直井信（岐阜県国際バイオ研究所・神経）、
錫村明生（名古屋大・環境・神経免疫）、
新田淳美（名古屋大・医・薬剤）

神経栄養因子である brain derived neurotrophic factor (BDNF)および glial cell line-derived neurotrophic factor (GDNF)は老化に伴う神経細胞死の防御はたらくことが期待される。脳内移行が可能な神経保護薬候補物質である propargylamine 化合物 (PR)は in vitro, in vivo の実験で神経細胞死を防御すると同時に、実験動物(ラット、マウス、ビーグル犬)の寿命延長効果を示すことが報告された。PR は in vitro で神経細胞内の転写因子を活性化し神経保護に働くタンパクを誘導することが証明され、特に神経栄養因子の増加が顕著であった。サルの神経老化に介入しそれを防御する試みとして、サルに PR を投与し脳脊髄液中の BDNF, GDNF の変化を検討することを目的として研究を行った。

まず、薬剤非投与条件で若年(3 y.o.), 成年(7-8 y.o.), 老齢 (20-30 y.o.) のオスニホンザル各2-4頭について脳脊髄液の分析を行った。その結果、GDNF および BDNF は加齢に従い低下する傾向が示された。一方成年オスニホンザル4頭に対しPRを投与したところ、非投与群(4頭)に比較してGDNF BDNF の一過性の増加傾向が認められた。

5 丹沢山塊のニホンザルの分布

福田史夫（共立薬科大）

丹沢山塊の森林面積約510平方キロにはニホンザルの群れが13群(平均群れサイズ=36, r:4-60)で約483頭が生息する(神奈川県, 2003)。これらの内、サイズの大きい7群が東丹沢に集中して偏在しており、他の6群は点在して分布している。1923年の故長谷部のアンケート調査(岩野, 1974)では、丹沢山塊では4箇所の生息域が報告されているが、これはいずれも現在の東丹沢の集中分布の地域であり、他の地域では生息情報が報告されていない。その後、アンケートや聞